

資料1

平成25年度 SSH運営指導委員会議事録

平成25年度 第1回SSH運営指導委員会議事録

- (1)日 時：平成25年11月5日(火) 12:00~15:00
(2)場 所：名古屋大学教育学部附属中・高等学校 第1会議室
(3)出席者：(五十音順・敬称略)

1. 運営指導委員

- 鮎京 正訓
(名古屋大学理事・副総長)
足立 守
(名古屋大学PhDプロフェッショナル登龍門 特任教授)
安彦 忠彦
(神奈川大学 特別招聘教授 (名古屋大学名誉教授))
大谷 尚
(名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教授)
斎藤 健一
(名古屋市立見付小学校 校長)
中谷 素之
(名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教授)
松村 年郎
(名古屋大学大学院工学研究科 教授)
渡辺 芳人
(名古屋大学理事・副総長)

2. 学校評議員 (学識経験者)

- 稲垣 康善
(豊橋技術科学大学理事 副学長・名古屋大学名誉教授)
高味 修一
(名古屋大学教育学部附属中・高等学校 同窓会会長)
西淵 茂男
(名古屋市教育委員会 教育次長)

3. 本校教職員

- 校長、副校長、運営委員、研究部員、専門職員、SSH事務員

1. 学校長挨拶

- 今年度でSSH第2期第3年次となり、2冊の本の出版をし、成果を形とした。
- SSH開始当初から生徒全員のサイエンス・リテラシー向上を研究目標としており、自然科学・数学などの理数系のみならず、人文・社会科学を含めて取り組んできた結果、それらの融合そして国際化へと広がってきた。

た。

2. SLP II「自然と科学」授業見学

3. 研究報告・協議

①SSHの方向性について

- SSH第1期の目的はカリキュラム作り。第2期の目的はその実践と評価。
- 本校のSSHの特徴は、中学1年生～高校3年生までの6学年全生徒を対象としていることで、中高一貫校としてのSSHの実践を行っている。
- 第1期の課題より
 - 生徒の自主的な活動(本校では生徒研究員制度という名称)が少ないという点について
→現在5プロジェクトがあり、活動数および参加する生徒の数が増えただけでなく、コンクールなどでの評価も受けるようになった。
 - 国際的な取り組みが少ない点について
→ニューヨーク研修を第2期より毎年実施し、バードハイスクールにて英語での研究発表等を行っている。他にも、ユネスコスクールとしての交流等、国際的な取り組みは広がってきた。

②教育評価の報告

- アンケートによる意識調査に加えて、第2期から大きく前進した部分は、記述式の問題での評価を行うようになったという点。
- 他校より問い合わせがあり、本校の問題とほぼ同じ問題を使って調査することになった。今後、このような形で他校との比較も考えている。

③出版物に関する報告

*出版物『始めようロジカルライティング』について(教材集)

- 実際の授業でも使えるような教材を作ったが、読み物としても使えるようなものとなった。
- 文章を書く際に課題となる、論理の一貫性を育てることを目標として、中・高生だけでなく大学生の指導にも使えるものを使った。

*出版物『協同と探究で「学び」が変わる』について

- 学びの量ではなくて質を問う時期で、学ぶ質を高めて学ぶ姿勢や感性や感覚を身につけるということが大切だと思っている。協同で探究することによって概念理解を深めることを目指し、子ども達の能力を

高めていく。そのような意味でこの本のタイトルをつけた。

- ・附属らしさという部分と附属以外でできる部分、ということを考える時期がきている。

④高大連携について

中間評価での「高大連携をどのように追求しているのか」という質問について

→大学の中に附属学校があるので、色々な専門の先生方が来校し、中高生が直接話を聞ける。高校2年・3年の生徒たちが名古屋大学の基礎セミナーに参加し、大学1年生と一緒にゼミで考え意見を述べている。また、中津川プロジェクトのように2泊3日で大学の先生が講義・実習を行うことにより、高校生の反応や、考えていることが先生にも伝わる。基礎セミナーは5年目、中津川プロジェクトは4年目となり、実績もできてきているので、今後は大学と一緒に高校と大学の教育のつながりについての追求をしていきたい。

⑤進路実績など

- ・近年附属学校の生徒の学力は上がってきている。
- ・昨年度は名古屋大学への現役合格者数が非常に多かった。他大学への受験を妨げるような指導は一切していないが、この学年に関しては意欲的に名古屋大学を希望して進学した生徒が多かった。

4. SLP II・中1地理 授業見学

5. 質疑・応答

- ・高校1年で内進生と外進生で当初学力に差があるという話があったが、中学の授業を見ていると、先生が子ども達の意見をうまく引きだそうとしているので、中学3年間に自分で考える力がつき、それが反映している気がした。

→協同的探究学習は概念理解を深めるために行っている。例えば、中学の理科の実験の前にまず予想させて意見を出して考える。実験後には結果から何が考えられるのかという時間を作り、そこから考えられる規則性をグラフや表にするなど表現し、それを共有し話し合いをした後、また自分に戻して理解を深めていく。このような手順をとるだけでも、生徒の理解度は変わってくる。

- ・今日見学した高校1年の地理はアフリカの授業だったが、現在アフリカなどでは砂漠化よりも土壤崩壊という問題が起きている。このように現代的な意味で課題となっているテーマの解明をする場合、グローバルな形での取り組みが必要となる。その観点からも、附属で行っているモンゴルやアメリカに学生を派遣するなどの外国経験は大変重要だと思う。さらにそのあたりの取り組み方を工夫していくと、

生徒にとってとても刺激的だと思う。

- ・先生方に、ある一定の学年の子どもの到達度、人間像を、もっと明確に持って欲しい。高校3年生が大学に入学する頃には、最低身につけておいて欲しいというものを明示して、子どもに知らせていくことにより、それが目標となる。

- ・21世紀型学力については今年度が最終年度で、過去5年間国立教育政策研究所がプロジェクトを持っていて最終報告を出す。その中間報告によると、アメリカだけでなくカナダ、オーストラリア、OECDなど全部対照しながら行ったプロジェクトでよくできている。ただ、大学の先生方にとっては、結局学力だけが問題となっているという印象がある。企業のみならず国際的な場面等で、信用できないような人間を果たして採用するのか。道徳性、人間性というものについて、一言も語らないようなプロジェクト結果では問題。そのような意味で高校生が一定のバランスのある教養をきちんと持てるような教育を、中学校1年から6年間行って欲しい。

→昨年度から本校が中心となってユネスコスクールネットワークを愛知県で作り、高校生のESDのコンソーシアムを立ち上げた。来年の名古屋での世界会議に併せてコンソーシアムを行うという計画を立てている。

- ・野外の行事や研究活動の際には、中学生、高校生がそれぞれ役割分担することにより、新たな経験ができて効果があるが、そのような機会はあるのか。

→名古屋市の読書フェスティバルでSSHの発表をする機会があった。生徒研究員制度の中学1年から高校2年まで参加し、高校2年生がリーダーとなり、中学生にお客さんへの対応を指導していた。

6. ご助言

- ・名古屋大学は国際化とグローバル化をはっきりと分けている。学部段階の国際化として、英語だけの学部を入れているが、これは英語力を高める等の国際化。また、ダイバーシティを理解してお互いを尊重し合いながら自分の個性を持つというのも国際化。グローバル化というのは、あるスタンダードで世界は1つという考え方で、自分の価値観をある意味押しつけ合うという厳しい世界。理工系の大学院は、世界の同じものさしで競争している。これは大学院教育のグローバル化で、世界のスタンダードのテキストを使う。多分附属で行っているのは国際化であってグローバル化ではないと思う。アメリカの高校と日本の高校で同じカリキュラムである必要はないという部分もあるので、そのあたりはもう少し使い分けた方が良い。

- ・自分の子どもが4人附属に在学していた際、4人とも高校生の時にAFSで留学した。受験の妨げとなるという理由で、留学を勧めない学校もあるとのことだった。人間をトータルに見るかどうかの違いだと思うが、附属では人格教育に重きを置いているということで、コンテストの受賞者がいなくても良いのではないか。
- ・SSHと国際交流がかみ合わない気がするが、SSHの中で国際交流はどのような位置づけとなるのか？NY研修など10名が参加するとして、個人の体験としては大変貴重だと思うが、個別の経験を帰国後どのように継続してその子の中で育てていくのかという部分と、行っていない子たちにどのように還元していくかを、具体的にマニュアル化していくべき。
- ・高校1年生と中学1年生の授業を見て、先生方が生徒の力をいかに引き出す場を作るかということが基本で、その中で協同的探究ということが機能するのだと思った。
- ・SLPⅡでは、教科を超えて科目が設定されているが、それによってどのような力を育てることを目指しているのか？理科・社会・数学を融合した授業ということで、先生のスタンスにも迷いがあるかもしれないし、生徒も教科という枠でないので、何を学んだらこの授業で何かをつかんだことになるのかということが分かりづらい。
- ・協同的探究は次期でも軸となっていく部分で、もちろん概念理解や概念推論はあると思うが、人に対する態度や、探究そのものに対する価値付けも必要ではないかと思う。
- ・個の評価を授業の中でもう少し行わないといけないのではないか。終わってからのアンケートや学力テストも大切だが、授業中に評価していくことも大事にしていくべき。子どもに対する評価というのは、本人も気付いていないことを先生が先に教えて初めて評価だと思う。そこまで達していくと次のレベルが見える。

平成25年度 第2回SSH運営指導委員会議事録

- (1)日 時：平成26年2月10日(月) 11:10~13:10
(2)場 所：名古屋大学教育学部附属中・高等学校 第2
総合教室
(3)出席者：(五十音順・敬称略)

1. 運営指導委員

- 鮎京 正訓
(名古屋大学理事・副総長)
足立 守
(名古屋大学PhDプロフェッショナル登龍門 特任
教授)
安彦 忠彦
(神奈川大学 特別招聘教授・名古屋大学名誉教授)
大谷 尚
(名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教授)
斎藤 健一
(名古屋市立見付小学校 校長)
高井 次郎
(名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教授)
藤村 宣之
(東京大学大学院教育学研究科 教授)
松田 武雄
(名古屋大学大学院教育発達科学研究科長・教育学
部長 教授)
脇田 貴文
(関西大学社会学部 准教授)

2. 学校評議員

- 高味 修一
(名古屋大学教育学部附属中・高等学校 同窓会会
長)

3. 本校教職員

- 校長、副校長、運営委員、研究部員、専門職員、
SSH事務員

1. 校長挨拶

2. SSH第3年次研究成果発表会の概要説明

3. 公開授業見学

4. 研究報告

5. ご指導・ご助言

- ・SLP II「情報と社会」の授業で、「行動することが大事だ」という生徒の発言があったが、その後どのような方向に進んでいくのかに関心を持った。人は行動すると「制度」にぶつかり、その中で苦しむという問題があるので、そういった具体的な話まで発

展すると良いと思う。

→今日の授業の中でも「制度」という看板があったが、ジェンダーについて考えている生徒たちが、「制度」を変えていかないと社会はうまく回らないと気づきキーワードとした。

- ・協同的探究学習は、昔から行われているグループ学習とどのように違うのかが気になる。それが、子供の成長や思考の深まりに、どのように機能しているのかを明確にすると良い。
- ・各教科と探究的学習授業のような特別な授業の関係づけを明確にすると良い。相互作用もあると思うが、各教科での成果をきちんとふまえていくことにより、より質の高い探究ができる。
- ・教科教育の布石の上で今日のような協同的探究学習がある。今日の発表は、非常にユニークで生徒の個性があふれ大変おもしろかった。あのような生徒同士の議論は、教科学習とどのようにつながっているのか？
- ・高大接続の観点からすると、授業研究を高大接続で行っているという側面と、生徒自身が高校から大学へSSHを通じて接続していくという両面がある。高大接続はSSHの取り組みの中でどのような位置づけになっているのか？
- ・前半はSLP II「科学とは何か」、後半SLP II「情報と社会」を見学した。見学者がいても生徒は物怖じせず、自由に伸び伸びと自分の意見を発言していて良かった。「情報と社会」で、蜘蛛の糸が平面で縦横につながっていたが、そこからもう一つ上の方に広がる軸があると良いと思った。
- ・SLP II「科学とは何か」を見ていた附属OBの先生が、生徒の様子が以前にも増して明るく輝いて表情豊かだと仰っていた。OBの先生からも意見を伺う場があると良い。
- ・教科の授業は、教えられている中身を生徒は疑わない体制で進めているが、SLP IIのような授業では、先生が言っていること自体を生徒たちが議論して問い直していくような授業となると良い。きちんと疑っていくような視点を作る授業が、今日のような形だと実践できる。
- ・授業見学では1つのグループをずっと見学していたのだが、非常に面白かった。見ている側が楽しいということは生徒もきっと楽しんでいる。それは授業の基本。生徒が楽しんでいる授業というのは本物の授業だと思う。
- ・SLP IIの授業を久しぶりに見学したが、教育方法の作成において先生方の工夫がたくさん入って、かなり技術力がアップしていると感じた。基本的なコン

- セプトは、生徒たちに色々発見させて自主的にアイデアを出し合い、その後自分たちで考えたことをまとめて発表するというもの。10年前はこのような基本的な取り組みだったが、今日は、3つのテーマの裏の共通点を示すために、「糸」を使ってそれをお互い関連づけていた。目で見て関連づけがわかるので、頭の中でイメージするより、非常にわかりやすい。
- ・総合人間科、学びの杜、新教科、その後SSH、基礎セミナーが始まった。このように授業の内容が増えて進化している。これまでの積み重ねをもとに、今後もさらに進化を継続して欲しい。
 - ・様々な形の授業に取り組んでいくために、全教員が関わって支えているのか？
 - 中心的に動いているのは、企画・立案・外部折衝を行うSSH推進委員会や研究部と運営委員。全教員が4つのグループ（評価・SLP・ASP・協同的探究学習）に所属し、1年間で実践をしていくという形になっている。教員の異動があまりない学校なので、研究活動を継続的に行うことができる。マネジメントする立場では大学や世の中の動向に目を向けながら進めるが、実際生徒と触れあっている教員はもう少し生徒目線になる。文系の教員がマネジメントや評価などを行い、理数系の教員が生徒研究員制度で生徒と一緒に研究を行うといった役割分担ができています。
 - ・協同的探究学習を通じて、理解・思考・表現の力を生徒につけることを目標に授業作りに携わっている。サイエンス・リテラシーとして必要なのは、断片的な知識の量ではなくて、知識を関連づけて思考・理解を深めること。国際的にも思考力・判断力・決定力育成は課題。楽しい授業、面白い授業の前提となるのは良い発問。今日の授業では、生徒の知識と関連づけられていて、色々なアプローチができ、自分なりの考えを表現することができる発問により、生徒が積極的に取り組む授業が展開されたように思う。「数学」の授業は、展開の公式が、何故そうなるのかを自分で説明するというものだった。このように発問で工夫をして子供に考えを書かせると、附属の生徒は1つの考えを書いたら次の考え方に取り組んだり、まず方針を立てた上で考えたりできる。手続的な知識やスキルの「できる力」だけでなく、知識を関連づけながら意味を考え、どのように考えればよいのかを追求していく思考力・判断力となる「わかる力」を高めていくための個別探究力は深まってきたのではないかと。
 - ・「理科」の授業では、一人一人が聞く姿勢をしっかりと持っており、他の生徒の発言をよく聞いて理解しようとしていたのが印象的だった。
 - ・協同探究の部分で、少し先生主導で関連づけようとしていると感じた。多様な発言をいかに関連づけながら、理解・思考の深まりにつなげていけるかというところが今後の課題。
 - 公開授業の場合、教員も落としどころが見えていないと、拡散して終わってしまうため、まとめようとする部分がある。
 - ・最後はもう一度個人で考えを深めさせるので、無理にまとめなくてもよいのではないかと。
 - ・協同的探究学習とグループ学習とは異なる。クラス全体の討論場を協同探究と言うのだが、そこでの発言を促すために中間段階としてグループやペアで取り組み、最終的に全体で討論した後、もう一度個別に探究させるということを協同的探究学習として考えている。グループ学習中心で、クラス全体での話し合いがないと、グループ差が出てしまう。
 - ・附属の評価に携わっている。「生物」の授業で、友達の発言をノートに書いていたことに感心した。先生の授業はノートに書くが、生徒の発言まで書き留めていくことは大学生でもなかなかできない。大学受験で難問をこなして入学した子供が、なぜグループ活動ができなかったり、友達の意見が聞けなかったりするの不思議に思っていた。附属では、大学入試で求められる力を養う教科教育を超えた何かを育てている。それが理解・思考・表現ということなのだと感じた。これをどのように評価していくのかを考えている。現在は自己報告式で、生徒のアンケート回答を数値化していくという方法だが、それを超えたものを開発していくことが課題。
 - 他校より、本校で作った評価の尺度を利用したいという依頼を2年前に受けた。この学校は本校と同じような規模の併設型中高一貫校で男女共学であり、SSH校でもある。そこで、お互いに比較検討もできるため、本校の尺度を使ってもらう方向で進めている。このように、本校の尺度が色々なところで使われていくことは一つの成果だと思う。
 - ・プログラムを評価する場合、その良い点や、問題点を知るためには、他と比較しないとわからない。比較する学校ができたので一緒に取り組み始めた。お互いが知りたいことを、それぞれ得ることができる関係となっていくものを考えたい。

6. 第4年次の取り組みについて

7. 閉会挨拶